

農 薬 名	成 分 名	系 統 名	RAC コード F:殺菌 I:殺虫	適 用 病 害 虫 名											注 意 事 項	
				か い よ う 病	灰 色 か び 病	黒 星 病	す す 斑 病	ゆ 合 促 進	ア ブ ラ ム シ 類	コ ス カ シ バ	カ イ ガ ラ ム シ 類	ウ メ シ ロ カ イ ガ ラ ム シ	カ メ ム シ 類	ケ シ キ ス イ 類		ア カ マ ダ ラ ケ シ キ ス イ
マスタピース水和剤	シュート・モス・ロゼシア	生物農薬	F:NC	小												小:【小粒核果類登録】
ムッシュボルドーDF	塩基性硫酸銅	無機殺菌	F:M01	小												小:【小粒核果類登録】
ユニックス顆粒水和剤47	シブ・ロジニル	アニリピリミジン	F:9			◎										
ロブラール水和剤	イブ・ロジニル	ジカルボキサイド	F:2		◎											
ICボルドー66D	塩基性硫酸銅	無機殺菌	F:M01	◎												
Zボルドー	塩基性硫酸銅	無機殺菌	F:M01	◎												
〈 殺 虫 剤 〉																
アクタラ顆粒水溶剤	チアトキサム	ネオニコチノイド	I:4A						◎				◎			
アタックオイル	マシン油	天然物由来	I:UNM								小					小:【小粒核果類登録】
アデオン水和剤	ベルメトリン	ピレスロイド	I:3A						◎						◎	
アドマイヤー水和剤	イタクロプリト	ネオニコチノイド	I:4A						◎							
アプロードフロアブル	グプロフェジン	IGR	I:16								幼					幼:【幼虫に適用】
アルバリン顆粒水溶剤	ジノテフラン	ネオニコチノイド	I:4A						小			小				小:【小粒核果類登録】
スタークル顆粒水溶剤	ジノテフラン	ネオニコチノイド	I:4A						小			小				小:【小粒核果類登録】
ウララD F	フロニカミド	その他	I:29						小							小:【小粒核果類登録】
オリオン水和剤40	アザカルブ	カーバメート	I:1A						◎							
キックオフ顆粒水和剤	クロラントラニプリロール・ジノテフラン	混合剤	I:28・4A										◎			
コテツフロアブル	クロルフェナピル	その他	I:13								小					小:【小粒核果類登録】
コルト顆粒水和剤	ピリフルキサゾール	その他	I:9B						小		小					小:【小粒核果類登録】
サムコルフロアブル10	クロラントラニプリロール	ジアミド	I:28								◎					
スカウトフロアブル	トラメトリン	ピレスロイド	I:3A						◎			◎				
スカシバコンL	シナセルア	フェロモン									果					果:【果樹類登録】
スプレーオイル	マシン油	天然物由来	I:UNM									◎				
石灰硫黄合剤	硫黄	無機殺菌	I:UN									落				落:【落葉果樹登録】
ダントツ水溶剤	クロチアジン	ネオニコチノイド	I:4A						◎			◎	◎			
バリアード顆粒水和剤	チアクロプリト	ネオニコチノイド	I:4A						◎						◎	
フェニックスフロアブル	フルベシジアミド	ジアミド	I:28								◎					
フォーリス粒剤	テフルトリン	ピレスロイド	I:3A												◎	
モスピラン顆粒水溶剤	アセタミプリト	ネオニコチノイド	I:4A						◎		◎		◎			
ラビキラー乳剤	MEP・PAP	混合剤	I:1B								◎					

注) イミダクジン酢酸塩とイミダクジンアルベシル酸塩は、成分が「イミダクジン」として取り扱われるので、使用の際は有効成分の総使用回数を超えないように注意する。

ウ 病害虫防除法（ウメ）

（ア）かいよう病 *Pseudomonas syringae* pv. *morsprunorum*

（防除のねらい）

病原細菌は枝病斑で越冬して翌年の伝染源になるので、越冬菌の密度低下を図るため、冬季せん定時の罹病枝除去を徹底する。また、病原細菌は気孔や強風雨によって生じる傷口から侵入するので、風当たりの強い園では防風垣、防風ネット等を設置する。薬剤による完全な防除は期待できないので、これらの耕種的な防除に重点を置く。

（耕種的防除法）

- （１）冬季のせん定時に罹病枝を除去する。
- （２）防風垣の整備を徹底する。
- （３）肥培管理を良くし、樹勢を強める。
- （４）排水の悪い園では、暗きょ等を設置する。

（イ）灰色かび病 *Botrytis cinerea*

（防除のねらい）

花卉や花がらに接している果実面に発生するので、防除は落弁期前後に行う。発生は天候に左右されるが、本県での発生は少ない。

（耕種的防除法）

園内の通風を図り、多湿を避ける。

（ウ）黒星病 *Cladosporium carpophilum*

（防除のねらい）

病原菌は前年の枝病斑で越冬して翌年の伝染源になる。また、本県では3月下旬～4月上旬頃に感染が始まり、20～30日の潜伏期間を経て発病する。そのため、初発を見てからの防除では手遅れとなるので、3月下旬から防除を行う。

（耕種的防除法）

冬季のせん定時に罹病枝を除去する。

（エ）すす斑病 *Peltaster* sp.

（防除のねらい）

病原菌は前年の枝病斑で越冬して翌年の伝染源になるので、越冬菌の密度低下を図るため、冬季せん定時の罹病枝除去を徹底する。果実への感染は4月下旬頃から始まり、5月中下旬以降感染しやすくなると考えられている。また、果実での発病は6月に入り成熟が進むと発生が増え、6月中旬以降多発することもあるので、収穫時期に合わせた防除が重要となる。

（耕種的防除法）

冬季のせん定時に罹病枝を除去する。

（オ）アブラムシ類

（防除のねらい）

モモアカアブラムシ、モモコフキアブラムシなどが寄生する。多発すると葉が巻葉するので、その際は浸透移行性のあるネオニコチノイド剤を散布する。

（カ）コスカシバ

（防除のねらい）

成虫は年1回、4～10月に発生する。越冬した幼虫が3月頃から枝幹部の形成層を食い荒らし、樹を衰弱させる。

薬剤防除は、薬液が樹幹部や主枝によくかかるように丁寧に散布する。

（耕種的防除法）

虫糞の排出や樹脂の漏出から幼虫の食入部を探し、樹皮を削って幼虫を捕殺するか、食入部の表面を金槌で叩いて幼虫を殺す。

（生物的防除法）

性フェロモン剤による防除

(キ) カイガラムシ類 (ウメシロカイガラムシなど)

(防除のねらい)

本県南部では年4回発生の地域が一部認められるが、多くの地域では年3回である。年3回発生の場合の幼虫ふ化期は、5月中～下旬、7月中～下旬、9月中～下旬である。また、世代を経るに従い齢期は不揃いとなり、ふ化期間も長くなる。

防除適期は幼虫ふ化最盛期で、これより早くても遅くても効果はかなり劣る。ふ化最盛期には、寄生部位周辺に幼虫が多数定着するので、容易に見分けがつく。

発生が少ないときは休眠期の防除に重点を置き、寄生蜂、テントウムシ等の天敵類の保護に努める。

(ク) カメムシ類

(防除のねらい)

果樹共通の項参照。

(ケ) アカマダラケシキスイ

(防除のねらい)

果実を食害する害虫で、6～7月に落果した果実に被害が発生する。成熟果実や腐敗した果実の匂いに誘引されると考えられており、特に傷のある成熟果実に最も多く食入する。

(耕種的防除法)

- (1) 樹冠下にネット等を張り、落果による傷を防ぐ。
- (2) 被害果実は放置すると本虫の増殖源となるので、早期に処分する。